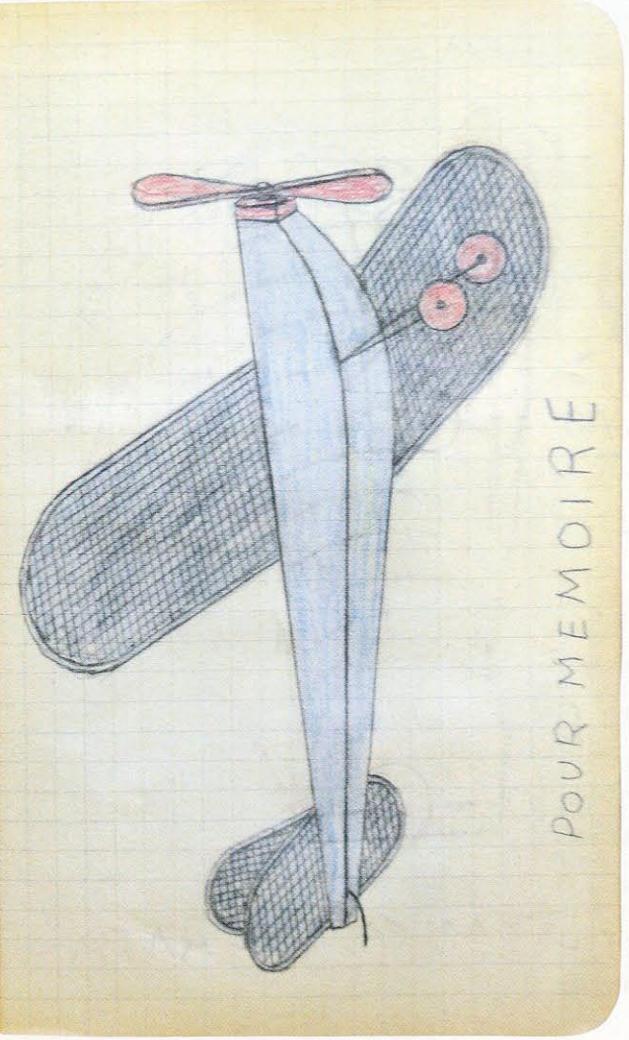


1 ノートを作り始めた2000年のノート。当初は覚え書きとして、書き留めておきたいものを何でも描いていた。2 古いカタログの枠組みが気に入り、それをコピーしペーパー作り、ノートに仕立て、オブジェを描き込んだ『マイリトル・レッド・ブック』(2012年)。3 さまざまな形の古い瓶のデッサンのみを描いたノート。黒地のページ作りが斬新です。4 アトリエの一角落に、ア

ンティークの紙束各種を重ねたテープル。ベン立てはすべてラベルを剥がした空き缶。もちろんDIY。5 既製のノートに描いていた昔のノートを開くワイスベッカーさん。6 約4冊で1年分というスケジュール帳は10×8cmほどのミニ手帳。自分の財布にぴったり収まるサイズにしたのだとか。7 "POUR MEMOIRE" (記憶のために)と題したデッサン。覚え書きノートから。

7



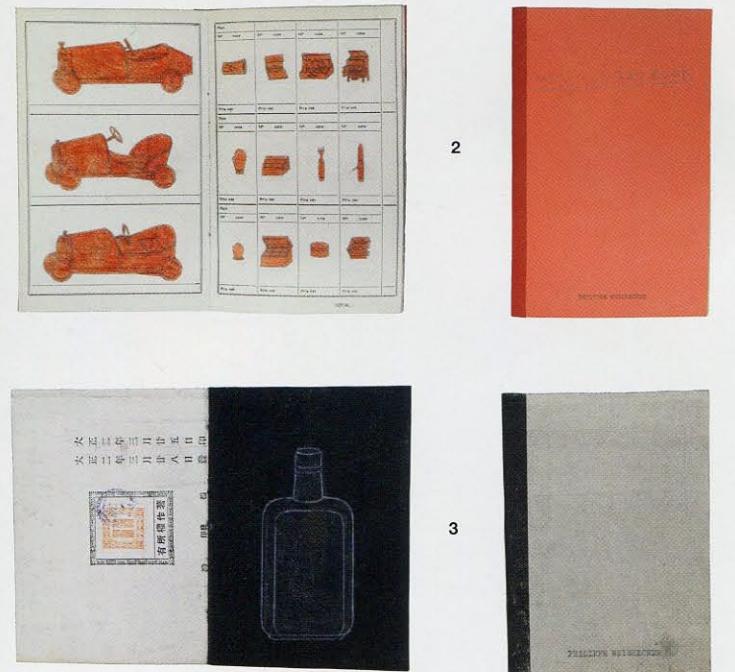
リティーがあるから。化学薬品を使わない40年代までの紙は新しい。時を経ても黄ばまないんだよ」アトリエの戸棚や引き出しには、古い紙束やノートのほか、20世紀前半の出納台帳から包装紙、お菓子の包装紙まで、さまざまな紙類が几帳面に整理されている。世界のどの街でも古い文房具屋や古本屋、のみの市で、こうした年代物の紙を収集してきた。それらが宝の持ち腐れになることなく、彼のノートの材料となり蘇る。「高価なものなんかないんだよ。好きだと思う紙を集めただけ」誰かの使いかけのノートや子供が絵を描いた古い紙など、ゴミ箱から拾つたものもあるという。

「人の想いや必要性から工夫したり、書きつけた痕跡は美しい」それは、ワイスベッカーさんが描き続ける、「日常の必要から生まれたさまざまな道具やオブジェ」の視線……。だから、ワイスベッカーさんの自作ノートは美しい。ただのモッタインイをはるかに超えた、一つの美しい作品になる。実際、一つのテーマを描き込む彼の自作ノートはアート作品である。が、それとは別にスケジュール管理に、またレシピの記録用に、薄くて小さな手のひらサイズも多数制作。それがまた魅力的。財布やポケットに入る、小さくて薄いものを年に数回作る。数か月分のスケジュール帳は、なくなりたときに次を作ればいいから」。まずは、その小さなノートの作り方を教えていただこう!



フィリップ・ワイスベッカー

1942年生まれ。国立装飾美術学校卒業後、60年代にNYに渡る。『ニューヨーク タイムズ』『ニューヨーカー』『ル モンド』など世界的主要雑誌のほか、広告作品でも活躍。近年は作品作りに集中し展覧会も多数。



PHILIPPE WEISBECKER

珠玉のドローイングが収まる、アーティストのノート。

文具を愛し、その機能を徹底的に知るアーティストが、知恵と工夫を凝らしてたどり着いた自作ノートの数々。ノートは、彼の豊かな作品世界を支えていました。

年

二、現在はパリとバルセロナを拠点に活動するフランス人アーティスト、フィリップ・ワイスベッカーさん。

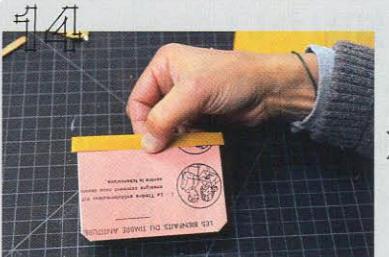
ユニークな視線と、シンプルで正確なラインが描き出す絶妙なボリューム感に魅了されるファンは多い。そんな彼の創作を支え続けるのが、さまざまなノートにしたためられた膨大なデッサンだ。日常のオブジェや古いカタログの中の道具、時には街をテーマに旅先で出会ったデザインや雑貨など、アーティストの眼を捉えたありとあらゆるものたちが丹念に描き込まれたノートがパリのアトリエに多数保管される。驚くべきことに、ほぼすべてのノートは最後の1ページまで書き尽くされているのだ!

一冊のノートを一つのテーマで通し、その仕事を終える。そう決めているから以前は既製の冊を終えるまで延々書き続けて、疲れたり、飽きちゃったり(笑)。残りページを無駄にしたくないしね。僕はもつと薄いノートが欲しかったんだ。ノート作りはそんな必要から始まっただけ」本人はいたってシンプルに「必要」と言うが、それはノートの厚さだけではない。サイズ、紙質、紙の厚さや手触り、色、表紙の風合いにいたるまで、彼のノートの必要性を満たしてなお、さらに「ワイスベッカー風」と称すべきスタイルがある。

「もともと文房具が大好き。特に古い時代の文具の持つ機能性、手を抜かないモノ作り、そしてその耐久性は現代のものにないクオリティがある。」

「ノートを一つのテーマで通し、その仕事を終える。そう決めているから以前は既製の冊を終えるまで延々書き続けて、疲れたり、飽きちゃったり(笑)。残りページを無駄にしたくないしね。僕はもつと薄いノートが欲しかったんだ。ノート作りはそんな必要から始まっただけ」

本人はいたってシンプルに「必



背帯をつける。

背帯は縦半分に折り目をつけ、内側に糊づけをして、ノートの折り目の左右にわずかずつ、はみ出させた状態で、接着する。



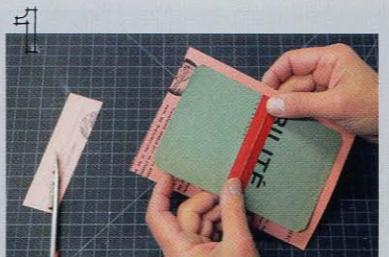
背帯を折り込む。

左右にはみ出している背帯の端を、ページ用の紙を少し持ち上げて、表紙の内側に折り返し接着する。



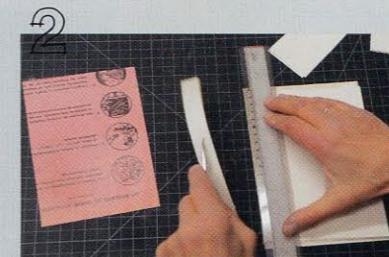
最終確認。

内側（表紙を開けたところ）は、こんな感じ。糊づけ部分がしっかりと乾いたら、これで完成！



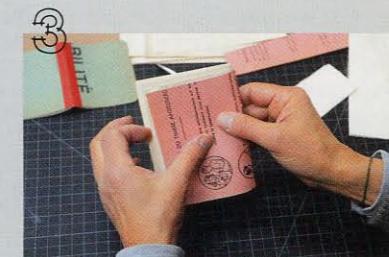
表紙の紙を切る。

表紙の紙を選んだら、作りたい大きさのノートなどを参考にして、前後左右それより少し大きめ（1～1.5cm見当）に表紙の紙を切る。最後の製本段階で形を整えるから、ここではラフな感じでよい。



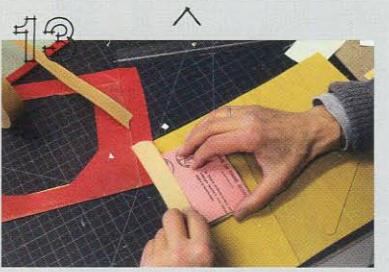
ページ用の紙を切る。

ページ用の紙を選んで重ね（この時点で重ねる紙の4倍がノートの最終的なページ数になる）、表紙を切り出したときと同様に、モデルのノートを開いた状態で上に重ね、それより少し大きめに切る。



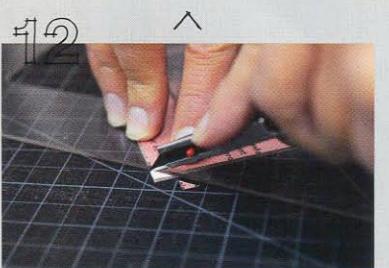
全体を重ねて折る。

表紙用の紙、ページ用紙ともに二つに折り、表紙用の紙の表側を上に全体を一つに重ねる。その際、内部に入れるページ用紙は定規の端などを使い、きっちり力を入れて折り目をつけておく。



背帯を選ぶ。

カラーコーディネーションを考えながら背帯の紙を選ぶ。ノート表面に出る帯幅の2倍幅をノート上下の長さより少し長めに余裕をもって切る。クラフトテープを使用する場合は、長さの調整のみでよい。



角をとる。

ポケットや財布に入れるミニ手帳は、入れやすいようにノートの2角（ノートが開く側の2つの角）を切り取る。こうしておけばノートの端がよれにくく、傷みにくい。ちょっとしたテクニック。

DIY NOTEBOOK



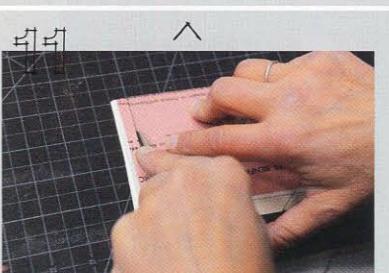
作ってみよう、 ワイスベッカーノート！

意外にも、身边にある紙と簡単な道具ですぐに作れるDIYノート。初めから出来上がりを想定せず、材料紙が持つ特性（裏に何か書いてあったり、模様があつたり）を生かし、その意外性を楽しもう。



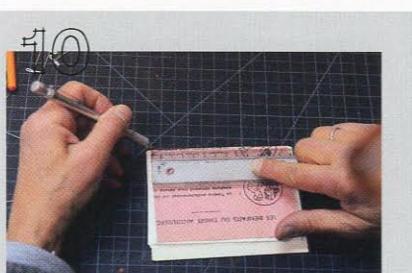
【材料と道具】

右上から時計回りに／針（たこ糸が通るくらいの大きめの針穴が必要）。T字針（ここでは絨毯編み用針を使用。なければ、太めの針で代用可）。ページ用紙。古いノートの残りページなど自由に。ステック糊。カッター。たこ糸、クラフトテープ（背帯用候補として）。三角定規と直線定規。ノートの背帯用の紙（固めでコーティングのある紙が理想的）。表紙用の紙。左は包装紙（薄い場合は台紙の裏表に貼ってから使用）。右中央は古いノートの表紙など、薄いボール紙程度の厚さの紙。ほかに（写真ではないが）鉛筆など、印をつける筆記用具。



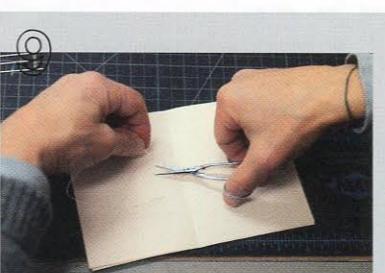
切り揃える。

三角定規の90度角を折り目に合わせ、ノートの上下をカッターで切りそろえる。ノートを裏返して残る一辺も同様に切りそろえる。毎回定規の90度角でゆがみができないように確認するのがコツ。



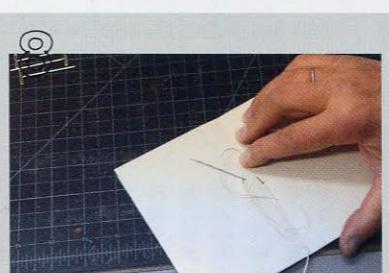
仕上がりサイズを決める。

ノートの仕上がりサイズを決める。ノートを折り疊んだ状態で、折り目の中心点から左右均等に確保できる長さを見計らい、仕上がりの大きさを決め、左右に印をつける。



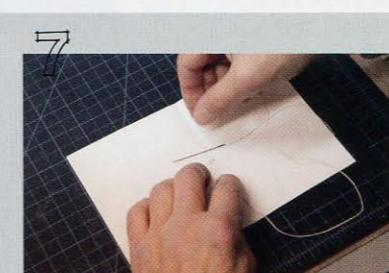
ノートをとじる(4)。

折り目の中心点にできた結び目が確認できたら、糸の先を切る。このとき糸の端を若干長めに残し、結び目が見えるように切るのがワイスベッカーノートの特徴だ。



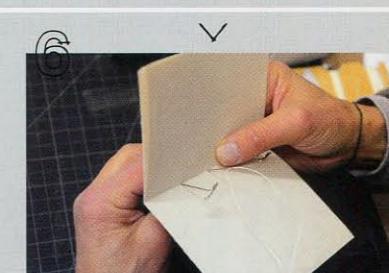
ノートをとじる(3)。

縫い目から出た針を数字の「8」を描くように（縫い目のない反対側の折り目方向に）戻し、糸の内側から外へ、針を通す。糸に弛みがないかを確認しつつ少しづつ糸を引き、折り目の中心に結び目を作る。



ノートをとじる(2)。

ノートの中心面を開き、（左右どちらかの）縫い目ができる側の、縫い目の内側に針を通して通す。この段階で糸を引かず、そのままノートを180度回転させる。



ノートをとじる(1)。

中心の穴に端を結んだたこ糸を通した針を内側から刺す。左右どちらかの穴から内側に針を戻す。中心から再度針を外に出す（左右どちらかに縫い目ができる）。針を通してない穴に外から針を返す。

もっと知りたい ワイズベッカーさんの文房具。

これだけノートにこだわりを持つワイズベッカーさんの、ノート以外の文房具のセレクトやコレクションも気になるところ。新旧取り混ぜた彼の文房具には一つの美学がありました。

ア

「ティストの審美眼で

選ばれる道具には、ま

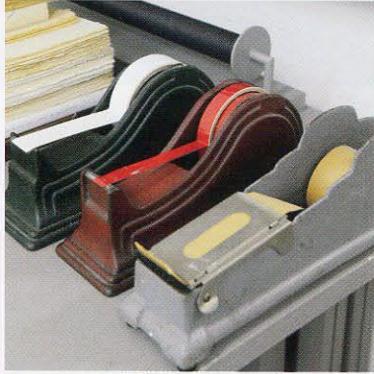
ず高い機能性は必須。

そこにさらなる「味」という要素

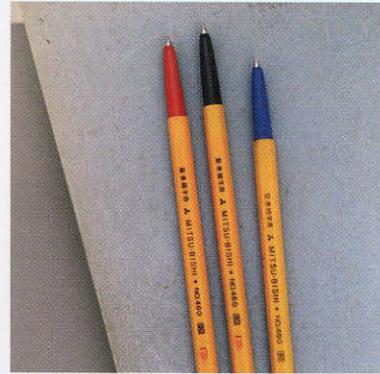
が加わる。徹底的に整理整頓され

るアトリエ内で、いい味を出す文

房具がそれぞれの居場所にきちんと収まる様は、見てるだけで嬉しい気分になってくる。「昔の道具が好き」という理由には、マテリアル（今は使われない錫や鉄など）の重量感、長年の使用にも質の変わらぬ耐久性がある。が、木製定規の中には半世紀を経て、直線があやしくなったものも。が、この不完全性さえ「気に入っている」と言う。特定の使用目的のために真摯に作られた道具のありよう、それを使う人の日々のたゆまぬ行為に向かわれる彼の視線は、いつも愛情にあふれている。



優に3kgはある鋳物製テープカッター（緑と深茶）は1930年代のアメリカ製。手前は水を含ませ糊を浮かせてシールなどをはがすための道具。



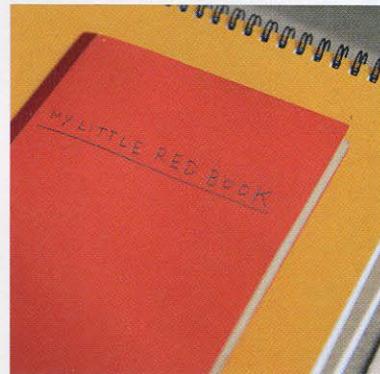
ボールペンは三菱鉛筆の《証券細字用》。キャップがなくシンプルで、インクの詰め替えが可能なのが気に入っている。来日の際にまとめ買いする。



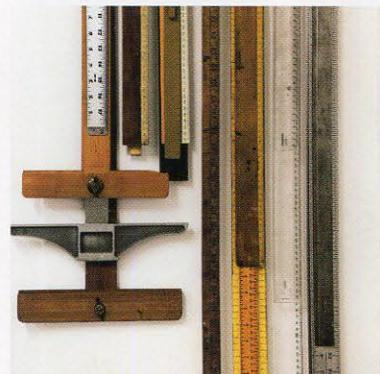
NYに住んでいたころに見つけた1940年代の手動鉛筆削り。米軍仕様と推察。金属の重量で安定感は抜群。中が見える透明部分は、なんとセルロイド製！



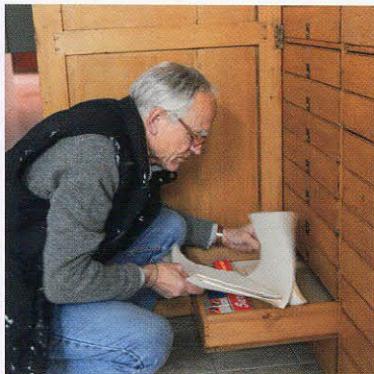
シャーペンシルも日々の必需品。ペン先に重心がかかる、バイロット《S10 0.9mm》が書き心地抜群。デザインはあまり好みではないが機能重視でこれ。



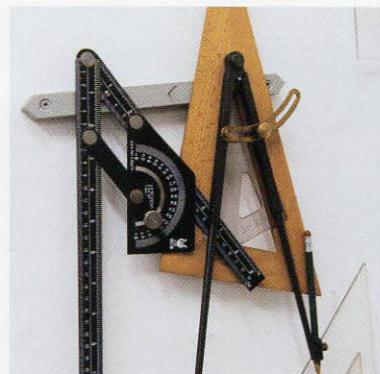
蚤の市で収集している1940年代以前の紙。サイズや紙の色（ホワイトやオフホワイト、透かし筋のある紙など）さまざま。手触りがよく、厚めで強い。



とにかく定規好き」と本人が笑うほど新旧、大小、素材違いの多数の定規が壁に掛けられ、毎日愛用。昔の定規は厚さがあり安定感が高いという。



数十の小引き出しがぎらりと並ぶ収納棚を多数持つワイズベッカーさん。消しゴムやペン先、インクなど、文具コレクションはまだまだある。



三角定規も木製、金属製、プラスチック製と数々揃える。鉛筆が挿入可能な分度器を取りつけることができる木製三角定規は20世紀中ごろのもの。



蚤の市で見つけた古い誰かの手帳数年分。ゴムでまとめていたそのままの状態が美しいと保存。開けて読むつもりもないが、これは特別な宝物。